



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語の謝罪表現「ごめん」と「ごめんね」について：ポライトネス理論の観点から
Author(s)	日高, 慶美
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 28, 71-88
Issue Date	2019-05-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74390
Type	departmental bulletin paper
File Information	071-088-05Hidaka.pdf



日本語の謝罪表現 「ごめん」と「ごめんね」 について

—ポライトネス理論の観点から—

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程

日高 慶美

日高 慶美
HIDAKA Yoshimi

On the Expressions of Apology in Japanese, *gomen* and *gomen ne*: An Approach from Politeness Theory

HIDAKA Yoshimi

abstract

The aim of this paper is to elucidate the underlying principle governing the use of the two conventional expressions of apology in Japanese, *gomen* and *gomen ne*, within the politeness theory proposed by Brown and Levinson (1987). First, on the basis of Itani's (1998) relevance-theoretic analysis of *ne*, I claim that *ne* appended to expressions of apology is a positive politeness strategy. Second, Brown and Levinson's (1987) observation that compounding strategies increases the relative politeness of expressions leads to the prediction that *gomen ne*, which has two positive politeness strategies, ellipsis and the particle *ne*, is more positively polite than *gomen*. This paper argues through an analysis of data from Japanese television drama scenarios that this prediction is correct.

1 はじめに

日本語の謝罪の定型表現は、滝浦（2008：117）が述べているように、語彙的な観点から大きく、「ごめん（～ごめんなさい）」類、「すまない（～すみません）」類、「申し訳ない（～申し訳ありません）」類に分けることができる。さらに、「ごめんね」、「すまないね」、「申し訳ないね」のように、それぞれの表現は終助詞「ね」の付加が可能である。Brown and Levinson（1987）（以下、B&L）のポライトネス理論を用いた日本語の謝罪表現の研究では、これらの定型表現は一律に「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」（negative politeness strategy）として捉えられている¹。そのため、例えば「ごめんなさい」類の「ごめん」と「ごめんね」のように同じ類に含まれる表現の違いについては十分に説明されていない。そこで、本稿では、「ごめん（～ごめんなさい）」類に含まれる「ごめん」と「ごめんね」に焦点を当てて、2つの表現のポライトネスの違いを説明することを目的とする。

本稿の構成は次の通りである。第2節では、謝罪表現における終助詞の機能について言及している先行研究を概観し、残された課題を示す。第3節では、Itani（1996）と井谷（1998）に基づいて謝罪表現に付加された終助詞「ね」の機能を規定する。そして、謝罪表現に付加された「ね」はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであることを示す。第4節では、B&L（1987）の説明に基づき、「ごめんなさい」の「なさい」が省略された「ごめん」に終助詞「ね」が付加された「ごめんね」はポライトネスが累積されているという仮説を提案する。第5節では、仮説から得られる2つの表現の使い分けに関する予測をドラマのシナリオを用いて検証する。第6節では、結論と残された課題をまとめる。

▶1 日本語訳は田中（2011）より引用する。以下も同様である。

2 日本語の謝罪と終助詞「ね」についての先行研究

日本語の終助詞と謝罪表現の研究は共に1980年代以降盛んに行われている。しかしながら、謝罪表現における終助詞の機能について言及している研究は少ない（Sandu 2011:105）。その数少ない研究には、陳（1987）、中田（2009）、Sandu（2011）がある。これらの研究では、2つの「ね」の機能が示唆されている。1つは、話し手の心理の伝達に関わる機能である。もう1つは、話し手と聞き手の間での理解や認識の一致を図るという機能である。まず、1つ目の機能から見てみよう。

発話行為論の観点から終助詞の分析を行った中田（2009）は、終助詞「ね」はSearle（1969）が発話行為論の中で提案している適切性条件の中の話し手

▶2 Searle (1969) 自身は謝罪行為の適切性条件は定義していない。本文中の謝罪の誠実性条件は中田 (2009) が定義しているものである。

▶3 七瀬は相手の心の中の声聴く能力を持っているため、瑠璃の心の中が聞こえる。

▶4 Lee (2007 : 367) は、「関与」(involvement) という概念を用いて『「ね」によって、相手と相互理解を確立するつもりで、話し手は聞き手と発話の内容や感情に関して『相手と協調することに取り組んでいる』と主張している。

▶5 謝罪表現は、感謝の機能として使用されることもあり、Sandu (2011) は終助詞「ね」の機能を「理解を求めるための『ね』」と「恩恵の認識を示す『ね』」の2つに分けている。しかし、本稿では、感謝の機能を持つ謝罪表現は扱わず、後者の「ね」の機能については今後の課題とする。

の心理状態に関わる「誠実性条件」を焦点化すると提案している。中田 (2009: 23) は、謝罪の誠実性条件は「SはAに対して悔いている」(Sは話し手、Aは自分の行為を示す)と規定し²、終助詞「ね」が謝罪表現に付加されることで、謝罪に込められた気持ちが前面に出ると述べている。中田 (2009) の説明では経験的な裏付けは示されていないが、たしかに、ドラマの中では (1) のように、話し手が後悔していることが現れている場面で「ごめんね」が使用されている例が見られる。

(1) 瑠璃：「ゴメンね、お葬式出られなくて」

瑠璃の心の中「マジ/ゴメン」³

瑠璃：「お客様の予約断れなくて」

瑠璃の心の中「マジ/ゴメン」

(『七瀬ふたたび』)

(1) の場面で、瑠璃は親友の七瀬の母親のお葬式に出られなかったことを謝罪している。瑠璃は心の中でも何度も謝罪していることから強く後悔していることがわかる。

「ね」が話し手の気持ちに関わっていることは、テレビドラマのデータを用いて謝罪表現の分析を行っているSandu (2011) でも指摘されている。Sandu (2011) は、データの分析の結果、「関与」(involvement) という概念を用いたLee (2007:373) が提案している「ね」が使用される2つの必要条件、1) 「話し手の主な関心は発話の内容に関して聞き手と協調することである」、2) 「話し手は、聞き手が発話の内容と感情を十分に理解してくれると想定している」は、「ね」が付加された謝罪表現の使用場面にも当てはまることを明らかにした⁴。Sandu (2011 : 106) は、謝罪表現に「ね」が付加される場合は、特に2つ目の条件が関わっていると主張し、「ね」の使用は聞き手が話し手の感情や話し手が犯してしまった行為の背後にある理由を理解してくれるだろうという想定に左右されると述べている (Sandu 2011 : 106)。しかしながら、Sandu (2011) が挙げている例の中には話し手の後悔が伝わらない場面もあり、謝罪における話し手の心理状態は謝罪の誠実性条件として規定される「後悔」といったものだけではなく、広く捉える必要があることがわかる。例えば、次の (2) はSandu (2011) が挙げている「理解を求める『ね』」の1つの例であるが⁵、謝罪内容や話し手の様子から話し手の気持ちに「後悔」があるとは考えられない。

(2) 奈央：ごめんね、先輩。結婚しないで楽しくやろうと言ってたのに。

聡子：なに言っているの。そんなの謝ることじゃないでしょ。

(『Around40—注文の多いオンナたち—』)

(2) の場面では、奈央は、先輩であり、親しい友人である聡子に「結婚しないで楽しくやろう」と言っていたのにも関わらず、結婚を決めたことに対して謝罪している。Sandu (2011) では詳しい状況説明はないが、この場面

の映像を確認すると、奈央は微笑みながら結婚報告と謝罪を行っており、「後悔」という気持ちを持っているようには思われない。

Sandu (2011: 108) は、(2) の場面における「ね」の使用は「謝罪する必要はないという事実があることによって、聡子の反応は既に奈央によって期待されており、それが『ね』によって暗に示されている」と説明している。ここでの説明における「謝罪の必要はないという事実があることによって」という点は、話し手と聞き手の間でそのような共通の認識がある、あるいは話し手がそう期待していると思なすことができる。この認識の一致という点は先行研究で示唆されている2つ目の「ね」の機能である。では、次に、話し手と聞き手の認識の一致という観点から終助詞を分析している陳 (1987) の説明を見てみよう。

陳 (1987) は、終助詞「ね」は、「聞き手の認識にたよって、または、聞き手の前で、話し手が自分の認識をたしかなものにするときに使われる終助詞である」(陳1987: 97) と定義している。そのため、「ね」は、基本的には、聞き手の方が認識の度合いが高いと話し手が考える情報に付く(陳1987: 94)。しかし、陳 (1987: 98-99) は、話し手と聞き手が一緒にいる場面で、両者の認識の程度が同じであることを前提に、相手の状況を察した話し手が「ね」を用いて発言をするときの用法も説明している。陳 (1987: 99) は、この場合、評価の表明は話し手の発言が先であるが、発言の態度として相手への同調や同情があるので、相手の認識をとおして自分の認識を高めるという「ね」の用法の範疇に入ると説明している。この用例として陳 (1987: 99) が挙げている表現の1つに「すみませんでしたね」がある。

陳 (1987) は、「すみませんでしたね」という例文を示すのみで、使用されている状況の分析は行っていない。しかしながら、ドラマから得られたデータの中には次の (3) のように相手の認識を先取りして、「ごめんね」が使用されている場面が見られた。

(3) 杏子:「…なんか、ごめんね」

柊二:「いや…」

(『Beautiful life』)

(3) の前の場面で、杏子の兄が病気を抱えている杏子との将来についてどのように考えているのかという質問を柊二にしており、杏子は兄の質問によって柊二に気まずい思いをさせたことを謝罪していると解釈できる。この「ね」の使用を陳 (1987) の話し手の認識を高めるという観点から考察すると、杏子は柊二が気まずい思いをしたことを察し、「ね」が付加された謝罪表現を用いて、柊二への同情を表し、柊二の状況についての杏子自身の認識を高めようとしていると考えられる。

このようにSandu (2011) と陳 (1987) の説明から話し手と聞き手の間での認識の一致が「ね」の機能に関わっていることがわかる。しかし、Sandu (2011) は話し手の気持ちを聞き手が理解すると話し手が想定していると捉えているのに対し、陳 (1987) は話し手が状況を察し聞き手に同情するとあり、

その方向性は異なる。

2.1 先行研究のまとめと課題

以上の謝罪表現に付加された終助詞「ね」の機能について言及している先行研究を見ると、終助詞「ね」は話し手の心理的な側面の伝達と謝罪内容の理解や認識の一致を図る機能があることが示唆されている。しかし、先行研究には2つの課題が残されている。第一に、3つの先行研究の統一的な説明が行われていないことである。つまり、先行研究で示唆されている2つの「ね」の機能がどのように関係しているのかは十分には説明されていない。加えて、Sandu (2011) と陳 (1987) の説明では、話し手と聞き手のどちらが相手の気持ちを理解するのかに違いが見られる。第二に、「ごめん」と「ごめんね」がどのように使い分けられているのかは説明されていないことである。

本稿では、この2つの課題を解決することを試みる。まず、Itani (1996) と井谷 (1998) の分析に基づいて謝罪表現に付加された「ね」の機能の統一的な説明を試みる。次に、B&L (1987) のポライトネス理論に基づいて「ごめん」と「ごめんね」の関係についての仮説を提案し、ドラマのシナリオを用いて仮説の検証を行う。

3 終助詞「ね」の機能とポライトネスの性質

本節では、Itani (1996) と井谷 (1998) に基づき、謝罪表現に付加された「ね」が聞き手に何を伝達しているのかを明らかにする。次に、「ね」のポライトネスの性質について述べる。

3.1 終助詞「ね」の機能

関連性理論の観点から終助詞「ね」を分析したItani (1996:166) は、「ね」は「発話によって伝達される想定を共通基盤として確立したいという話し手の願望」を伝達していると主張している。井谷 (1998) では、「共通基盤」(common ground) という概念からより認知的な概念である「相互顕在性」(mutual manifestness) という概念に変え⁶、さらに、命題内容だけではなく、それに付随する話者の態度もより相互に顕在的にしていると主張を修正している。井谷 (1998:29) が挙げている次の感嘆文の例を見てみよう。

(4) 何て寒いんでしょうね。

(井谷1998:29)

(4) は、「何て」の部分が完結される必要がある不完全な命題に対して感嘆を表している感嘆発話である (井谷1998:29)。しかし、話し手自身は、例えば極度に寒いという事実を知っているので、「極度に寒い」と完結された命題に対して感嘆の態度を表わしている (井谷1998:30)。そして、感嘆発

▶6 井谷 (1998) は、mutual manifestnessを「相互明示性」としているが、本稿では、内田聖二・中達俊明・宗南先・田中圭子 (1999) の訳に従い「相互顕在性」とする。

話に付加された終助詞「ね」は、「寒いということのみ認知レベルで共有するのではなく」(井谷1998:31)、命題内容に付随する「寒さを耐え忍んでいる」という話者の態度(感嘆態度)も認知レベルで共有したい意図があると井谷(1998:31)は説明している。井谷(1998)は、謝罪という発話行為の分析は行っていないが、本稿ではItani(1996)、井谷(1998)に基づいて、謝罪表現に付加された「ね」は次の(5)の機能を持つと規定する。

- (5) 謝罪表現に付加した「ね」は、謝罪の命題内容とそれに付随する話し手の態度を話し手と聞き手の間に相互に顕在的にしようという話し手の願望を伝達している⁷。

では、謝罪の場合の命題内容はどのように完結すると考えられるだろうか。Watts(2003:211)は、(6)の質問に対して自分が(7)のように謝罪を伴って返答したときの聞き手の解釈を次のように示している((8)、(9)、(10)のRJWはWattsのことである)。

- (6) Where's Margaret this evening? (Watts 2003:210)
 (7) Sorry, I don't know. (Watts 2003:210)
 (8) <RJW does not know where Margaret is this evening> (Watts 2003:210)
 (9) <RJW is sorry about something> (Watts 2003:211)
 (10) <RJW is sorry that he doesn't know where Margaret is> (Watts 2003:211)

Watts(2003:210-211)は、質問の返答としての聞き手の最初の想定は(8)であるが、“sorry”という発話があることにより、(9)が命題として形成され、(8)と(9)の隣接性から(10)の論理的推論に至ると分析している。この分析から謝罪の発話は、謝罪内容が命題として埋め込まれることによって完結することがわかる。上の例(1)を(11)として再考してみよう。

- (11) 瑠璃:「ゴメンね、お葬式出られなくて」
 (12) <瑠璃はお葬式に出られなかったことについて謝罪している>

(11)は質問の返答ではなく、過去の話し手の行為に対する謝罪であり、また、発話に命題内容が含まれている点で(7)とは異なる。そのため、Watts(2003)と全く同じ分析はできないが、(12)のように「瑠璃はお葬式に出られなかった」という命題が埋め込まれ、謝罪の発話として完結していると考えられる。したがって、(11)における「ね」は、命題内容である「瑠璃はお葬式に出られなかった」と、「お葬式に出られなかったことを悔いている」といった話し手の態度を相互に顕在的にしたいという話し手の願望を伝達していると考えられる。

謝罪表現に付加した「ね」を(5)のように規定することで、先行研究で示されている謝罪表現における「ね」の機能を統一的に説明することが可能となる。まず、中田(2009)とSandu(2011)が示唆していた「ね」と話し

▶7 顕在化される命題内容や話し手の態度には様々なものがあると考えられる。井谷(1998:39-40)は、「発話から導かれる含意もネのスコープの射程内に入る」と主張しているため、謝罪表現が字義通りではなく感謝やアイロニーの機能を果たす場合、含意として導かれる感謝やアイロニーの態度が顕在化されると考えられるが、本稿では謝罪として機能している表現のみを扱う。

手の気持ちや感情との関わりは、「命題内容に付随する話者の態度」を顕在化したいという話し手の願望の伝達と捉えられる。つまり、(11) のように「後悔している」という話者の態度や、Sandu (2011) が考察している例 (2) のように「理解してほしい」という話者の態度が顕在化されたりすると考えられる。

次に、Sandu (2011) や陳 (1987) の話し手と聞き手の理解や認識の一致は、「謝罪の命題内容」を相互に顕在化することと捉えられる。例えば、例 (3) の「…なんか、ごめんね」は謝罪内容が発言されていないが、「ね」の付加により、何等かの命題内容を話し手と聞き手の間で相互に顕在的にしたいという話し手の願望が聞き手に伝わる。そして、(3) の文脈から「杏子の兄の質問が柊二に気まずい思いをさせた」という命題内容が聞き手によって補われ、その命題内容を相互に顕在化したいという話し手の願望が伝達されると考えられる。ここで注意したいことは、陳 (1987) が話者の態度には同情があると述べているように、この場合も命題内容だけではなく、それに付随する話し手の態度も顕在化しようとする話し手の願望があることである。さらに、顕在化される話し手の態度によって Sandu (2011) と陳 (1987) の考察の相違も説明できる。つまり、「理解してほしい」という話し手自身の気持ちであれば、Sandu (2011) が考察しているように聞き手に理解を求めていると解釈でき、「申し訳ない」という相手に対する気持ちであれば、陳 (1987) の説明のように聞き手に対する同情という解釈が可能となる。次の節では、「ね」のポライトネスの性質を説明する。

3.2 終助詞「ね」のポライトネスの性質について

B&L (1987) のポライトネス理論では、人は基本的な欲求としての2つの「フェイス」を持っていると仮定し、それぞれのフェイスに向けられた2つのポライトネスを提案している。1つは、「自らの行為を妨げられたくないという欲求」(B&L 1987:13) の「ネガティブ・フェイス」に向けられた「ネガティブ・ポライトネス」であり (B&L 1987:70) であり、一般的にフォーマルなポライトネスとして馴染みが深いものである (B&L 1987:62)。もう1つは、「(何等かの点で) 認められたいという欲求」(B&L 1987:13) の「ポジティブ・フェイス」に向けられた「ポジティブ・ポライトネス」であり、親密な関係における言語行為と関連している (B&L 1987:103)。そして、B&L (1987) は、ある種の行為は本質的にフェイスを侵害するとし、そのような行為を「フェイス威嚇行為」(face-threatening act) (以下、FTA) と呼び、フェイスへの侵害を補償するための戦略として、「ネガティブ・ポライトネス・戦略」や「ポジティブ・ポライトネス・戦略」を提案している⁸。では、終助詞「ね」は、どちらのポライトネス・戦略になり得るのだろうか。

Itani (1996) は、「ね」の意味機能は本質的にはポライトネスとは関係ないが、話し手と聞き手の間で共通基盤を確立したいという話し手の願望を伝える「ね」は、B&L (1987:177) がポジティブ・ポライトネス・戦略として挙げている「『共通基盤』(common ground) を主張する」になり得る

▶8 B & L (1987) は、2つのポライトネス・戦略の他に、「補償行為をせず、あからさまに」(without redress action, baldly)、「オフ・レコード」(off record)、「FTAをするな」(Don't do the FTA) という戦略も提案している。

ことを説明している⁹。しかしながら、Itani (1996)、井谷 (1998) は、2つの観点から終助詞「ね」がポライトとはならない場合を述べている。1つは、B & L (1987: 144) の「推定/想定するな」というネガティブ・ポライトネス・ストラテジーに違反する場合である。次の (13) の例を見てみよう。

(13) 今何時ですかね。 (Itani 1996: 168)

(13) における話し手は「ね」を使用することによってその答えを共通基盤として確立したいという話し手の願望を伝達しており、「ね」はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーのように思われる。しかし、例えば、見知らぬ人に (13) のような「ね」が付加された疑問文を使用するのは、ポライトではなく失礼になる (Itani 1996: 169)。Itani (1996: 169) はこの理由を、(13) は、話し手が質問することが共通基盤になり、質問する権利があるという想定を伝達するため、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの違反になると説明している。

2つ目の観点は、「ね」が聞き手のフェイスを脅かす発話の中で使用された場合である。次の例 (14) の例を見てみよう。

(14) あなたがグラスを割りましたね。
(Itani 1996: 173 (訳は筆者による))

Itani (1996: 173) によると、(14) の発話における「ね」は、共通基盤を確立したいという話し手の願望を伝え、それは聞き手がグラスを割ったということを聞き手に認めさせる効果を持つ。このような内容を共通基盤として確立することは、聞き手のフェイスを侵害することになってしまう。つまり、ポライトになるか否かは話し手が何を共通基盤として確立したいかによるのである。では、謝罪表現に「ね」が付加する場合について考えてみよう。

謝罪においてもSandu (2011: 106) は、終助詞「ね」が付加された謝罪表現が使用されるのは、近い関係の相手や家族に対してであると述べている。そして、その理由を、関係性の近い友人や家族は、些細なことを見逃してくれる傾向にあり、また、話し手もそのように期待している相手であるためと説明している。つまり、「ね」が使用できるのは、謝罪内容と話し手の態度について共通基盤を主張することができる関係ということになる。

次に、上で述べたように「ね」の付加がポジティブ・ポライトネスになるのは、共通基盤を確立することが相手のフェイスの侵害にならない発話の場合である。では、謝罪はどうだろうか。謝罪は侵害された相手のフェイスを修復する行為であると考えられる (Ogiermann 2009)。そのため、(14) の場合と異なり、話し手と聞き手との間で共通基盤を確立し、謝罪をすることは、聞き手のフェイスの侵害にはならないと考えられる。したがって、謝罪表現に付加される「ね」はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの機能を持つと考えられる。

本節では、Itani (1996) と井谷 (1998) に基づいて、謝罪表現に付加され

►9 終助詞「ね」のポライトネスの性質については、B & L (1987) のように発話内効力を緩和するネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとして見なす立場、村田 (2002) のようにポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであると主張する立場、宇佐美 (1999) の終助詞「ね」の語用論的機能によってネガティブ・ポライトネス、ポジティブ・ポライトネス、中立なストラテジーになると主張する立場がある。

た「ね」は、謝罪の命題内容とそれに付随する話し手の態度を相互に顕在的にしたいという話し手の願望を伝えていると提案した。そして、共通基盤を示せる相手であれば、謝罪に付加された「ね」はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとなることを示した。次の節では、B&L (1987) のポライトネス理論を用いて、「ごめん」と「ごめんね」についての仮説を提案する。

4 「ごめん」と「ごめんね」のポライトネスについて

第3節では、「ね」は謝罪表現に付加されるときにポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとしての特徴が見られることについて述べた。本節では、B&L (1987) のストラテジーを組み合わせることでポライトネスが累積されるという説明に基づいて、「ごめん」に「ね」が付加されるとポジティブ・ポライトネスの度合いが累積されるという仮説を提案する。

4.1 ポライトネスの累積

B&L (1987 : 93) は、ストラテジーに関して一般的に観察される事柄として次のように述べている (Sは話し手、Hは聞き手を意味する)。

- (15) 一般に、Sがフェイス保持のために言語行動に『努力』(effort) すればするほど、Sはそれだけ多く、Hのフェイス欲求が満たされるべきであるという自分の心からの願望を伝えることになる (後略)。

(B&L 1987 : 93)

B&L (1987 : 93) は、その努力の方法としてポライトネスを実現するためのストラテジーを組み合わせることで使うことや特定の手段を細心の注意を払って実行することを挙げている。例えば、B&L (1987 : 93-94) はネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの例として次の (16) を挙げている。

- (16) I'm terribly sorry to bother you with a thing like this and in normal circumstances I wouldn't dream of it, since I know you're very busy, but I'm simply unable to do it myself, so...

(B&L 1987 : 93-94)

(16) は、複雑な構文や副詞が連ねられ、謝罪やためらいの気持ち、相手に対する敬意、自分の無力さの卑下など様々なネガティブ・ポライトネス・ストラテジーが組み合わされている。このような発話は、上で述べたように、聞き手のネガティブ・フェイスを満たそうという話し手の願望を伝えていることになり、ネガティブにポライトな表現であると捉えられる。B&L (1987 : 94) は、ネガティブ・ポライトネスと同様に、「ポジティブ・ポライトネスの

表現や、精妙に構成されたオフ・レコードの暗示のために費やされる努力は、Hのフェイス欲求を満たそうという気持ちを伝えている」と述べている。さらに、B&L (1987: 94) は、そのような努力の発揮はポライトな言語使用と密接に関わっていると述べている。本稿では、B&L (1987) が説明しているこのポライトネスの度合いが上がるという現象を「ポライトネスの累積」と呼び、改めて次の (17) ように定義する。

(17) 「ポライトネスの累積」

一般に、聞き手のフェイス欲求を満たすための両立可能な言語ストラテジーが多く使われるほど、ポライトネスの度合いは大きくなる。

次の節では、(17) の現象が「ごめん」と「ごめんね」の関係でも生じているという仮説を提案する。

4.2 「ごめん」と「ごめんね」のポライトネスについて

これまで日本語を対象とした研究において、謝罪の定型表現はネガティブ・ポライトネス・ストラテジーであると捉えられている (Yamazaki 2000、張 2007)。しかし、B&L (1987: 271) は、ネガティブ・ポライトネスを表す表現でもポジティブ・ポライトネス・ストラテジーである「省略や縮約」によってポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとなるという英語の現象を説明している。日高 (2017) は、このB&L (1987) の説明に基づいて「ごめんなさい」の「なさい」を省略した「ごめん」はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーに転換されていると主張した¹⁰。3節で示したように、謝罪表現に付加される「ね」は、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであると考えられる。このことから、「ごめんね」は「省略」と終助詞「ね」の2つのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが含まれていると考えられる。そこで、本稿では「ごめん」と「ごめんね」について次の (18) の仮説を提案する。

(18) 「ごめん」と「ごめんね」のポライトネスの累積仮説

ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーである「ごめん」にポジティブ・ポライトネス・ストラテジーである終助詞「ね」を組み合わせた「ごめんね」は、ポジティブ・ポライトネスの度合いをより大きくしたものである。

(18) の「ごめんね」は「ごめん」よりもポジティブ・ポライトネスの度合いが大きいという仮説から2つの表現の使い分けについての予測が得られる。次の節では使い分けの予測について説明する。

4.3 「ごめん」と「ごめんね」の仮説から得られる予測¹¹

B&L (1987: 74) は、ストラテジーの選択は、FTAの深刻度の度合いによって決まると主張している。そのFTA深刻度の度合いを決める要因として、3つ

▶10 『大辞林』の「ごめん」の定義には「『ごめんなさい』の略」(松村: 948) とある。

▶11 4.3節のB&L (1987) のFTAの深刻度の度合いとストラテジーについての説明は、日高 (2017: 42-43) を一部修正したものである。

の社会的要因—話し手と聞き手の「社会的距離」(social distance : D)、話し手と聞き手の相対的力 (power : P)、特定の文化における絶対的な「負荷度」(ranking of imposition : R) —が挙げられている。B&L (1987) は、FTAの深刻度の度合いが小さいときにポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが、大きいときにネガティブ・ポライトネス・ストラテジーが使用されると説明している。例えば、(19) と (20) はどちらも時間を尋ねるときの発話であるが、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの (19) はネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの (20) よりもFTAが小さいときに使用される。

(19) Got the time, mate?

(20) Excuse me, would you by any chance have the time?

(B&L 1987 : 80)

B&L (1987 : 80) は、この2つ例文はDを変数とし、PとRについて話し手は一定に小さく評価していると仮定している。そして、(19) は知人などのDの小さい関係の相手に対して、(20) は面識のない相手などのDの大きい相手に対して使用されることが直観的にわかるとB&L (1987:80) は述べている。すなわち、Dの大きさによって、3つ変数の総和であるFTAの見積もりが小さいときにポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが、大きいときにネガティブ・ポライトネス・ストラテジーが使用されるのである。

B&L (1987:142) は、ポライトネスの度合いの高い表現を使用するときに、予測されるFTAの深刻度の見積もりとは異なるものが出てきても、「それがDやPにおける(認識された)変化を伝達することを前提にして考えられる」(B&L 1987 : 142) と述べている。なぜなら、FTAの深刻度の見積もりを予測されるよりも大きく見積もってもそれをネガティブにポライトに振る舞うための努力という前提がなければ、よそよそしい冷淡な感じに聞こえたり、アイロニー的になってしまったりするためである。では、ポジティブにポライトに振る舞うための努力が前提になるときはどのように考えられるだろうか。

B&L (1987) では、ポジティブ・ポライトネスの度合いについてはほとんど述べられていないが、ネガティブ・ポライトネスとはちょうど逆のことが考えられる¹²。つまり、ポジティブ・ポライトネスの度合いが高い表現が使用されるときは、話し手がポジティブにポライトに振る舞おうとしていることを前提に、FTAは予想されるFTAの深刻度よりも小さく見積もられると考えられる。従って、(18) のポライトネスの累積仮説からは、「ごめんね」は「ごめん」よりもFTAの深刻度の見積もりが小さいときに使用されるという予測が得られる。次の第5節では、テレビドラマのシナリオを用いて予測の検証を行う。

▶12 FTAの深刻度の見積もりについて、ポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスで逆のことが予測できるのは、B&L (1987 : 246-247) は、ポジティブ・ポライトネス文化では3つの要素を低く見積もることを本来的な理想とされる一方で、ネガティブ・ポライトネス文化では、それらを高く見積もることを理想としていると述べていることからわかる。

5 「ごめん」と「ごめんね」についての仮説の検証

本節では、「ごめんね」は「ごめん」よりもポジティブ・ポライトネスが累積されているという仮説を検証するために、ドラマのシナリオからデータを集め、2つの表現の使用場面のFTAの深刻度の見積もりの大きさの違いと謝罪内容や状況の違いを分析する¹³。

5.1 使用するシナリオと分析対象

分析に用いたシナリオは、テレビドラマ『Beautiful life—ふたりでいた日々—』と『七瀬ふたたび』のシナリオである¹⁴。分析対象は、前者のドラマで恋人関係になっていく杏子と柊二、後者のドラマの友人関係の七瀬と瑠璃の間で使用された「ごめん」(30例)と「ごめんね」(15例)である¹⁵。そのうち、柊二は「ごめん」を10回、「ごめんね」を1回、杏子は「ごめん」を14回、「ごめんね」を11回、七瀬は「ごめん」を3回、「ごめんね」を2回、瑠璃は「ごめん」(心の声を含める)を3回、「ごめんね」を1回使用していた。本稿で特定の人物間の謝罪表現をのみを対象とするのは、FTAの深刻度の見積もりを決める要因であるDとPを一定にし、謝罪する内容の負荷度の大きさであるRの大きさによって2つの表現の使い分けを考察するためである¹⁶。まず、それぞれの表現の使用場面を考察する。

5.2 「ごめん」が使用されている場面とR要因の考察

2つのドラマのシナリオの中で「ごめん」は、Rが大きい場面でも小さい場面でも使用されていた。Rが大きい場面の例である(21)は、杏子と柊二が喧嘩をしている場面である。

(21) [柊二が他の女性をバイクの後ろに乗せたことを責めている電話でのやり取り]

杏子:「でも、バイクに乗っけることないじゃない! 私だってバイク乗りたいよ。でも乗れないんだよ!」

柊二:「— (ガツンと来るが、共に疲れる)。悪かったよ」¹⁷

杏子:「……」

柊二:「ゴメン (ちょっとやれやれ)」

杏子:「いいけど……。こっちこそゴメン (小声)」

柊二:「ワルイ、今、まだ店なんだ。帰ったら電話するから……」

(『Beautiful life』)

(21)は、柊二が他の女性をバイクの後ろに乗せて走っているところを見ると、杏子が柊二に詰め寄る場面である。柊二は「悪かったよ」と自分の非を認め、さらに、その後、無言になった杏子に「ゴメン」と謝っている。その謝罪に対し、杏子も「こっちこそゴメン」と謝罪している。この場面では、

▶13 ドラマのシナリオを用いるのは、データを効率よく収集することができ、文脈や、登場人物の気持ちが描写されているため、詳細な分析が可能であると考えたためである。研究のデータとしてドラマの会話を用いることについての意義については熊谷(2003)を参照。

▶14 以下『Beautiful life』とする。『七瀬ふたたび』は、脚本家である伴一彦のウェブサイト『Ba is for Ban』から引用した(<https://www.plala.or.jp/ban>)。なお、この2つのシナリオはSandu(2011)もデータとして用いているが、2節と5節に挙げた例の考察は行っていない。

▶15 本稿の分析対象からは除いたが、「ごめんね」という表現も柊二によって1回使用されていた。終助詞「な」について、陳(1987)は終助詞「ね」と同じ機能を持つとしているが、「話し手がいつも対等か目下である」、独話場面でも使用できるという特徴を挙げている。柊二の「ごめんね」の使用場面は、「ごめんね」と同様、Rが小さく、謝罪内容がその場面において明確ではないという特徴が見られたが、謝罪表現における終助詞「な」の分析は今後の課題とする。

▶16 『Beautiful life』において、杏子と柊二は偶然の出会いから、知り合いになり、恋人関係になっていく。本稿の(22)、(23)の場面ではまだ恋人関係ではないが、お互いにため口で話していることから、Dは一定程度に小さいと考える。

▶17 丸括弧の中はト書きである。以下も同様である。

是認されたいというお互いのポジティブ・フェイスを侵害していると考えられる。ポジティブ・フェイスに与えるRの大きさは、フェイスに与えられる「痛み」(pain)の量で測られるとB&L(1987:78)は述べており、この場面では二人とも「痛み」を感じていると考えられることから、Rは大きいと捉えられる。

一方、自分の行為が相手に迷惑をかけてしまったと話し手が強く思っている(22)の場面でも「ごめん」が使用されている。

(22) [柊二が考えたヘアスタイルが描かれたスケッチブックを柊二のライバルの美容師に渡してしまったことを杏子が謝罪する場面]

柊二：「どうしたの？」

杏子：「ごめん」

柊二：「何が？」(キツイ感じでなく。)

杏子：「スケッチブック……」

柊二：「ああ。気にしない、気にしない。」

(『Beautiful life』)

(22)の場面で「何が？」や「気にしない」というセリフから、柊二は杏子の行為を責めていないことがわかる。しかしながら、杏子がスケッチブックを柊二のライバルの美容師に渡してしまったことで柊二に迷惑が掛かったことは事実であり、杏子はそのことを深刻に捉えている。そのため、Rを大きく捉えていると判断できる。

「ごめん」はRが大きい場合でも使用されており、次の(23)はその例である。

(23) [車いすから降りている杏子は動けないので、トイレの前から離れてほしいと言う柊二に対して謝罪する場面]

柊二：「(中から)悪い、落ち着かないから、ちょっと離れ…あつ、離れられないか……」

杏子：「ごめん、だって、動けない」

(『Beautiful life』)

(23)における謝罪は、(21)と同様に杏子と柊二のやり取りの途中で生じた謝罪である。しかし、(21)と異なり、(23)は喧嘩をしている様子ではない。また、柊二は杏子がある場から離れられないことに気づき、依頼を途中で止めていることから、杏子もRをそれほど大きく捉えていないと考えられる。

上の3つの例の他にも、「ごめん」は、聞き手に対する発言、約束の時間に遅刻したこと、隠し事をしたこと、話を聞いていなかったことなど様々な謝罪内容の場面で使用されていた。しかし、今回分析対象とした30例のうち上に挙げた(22)以外は、Rの大きさに関わらず、その場面における話し手の言動、あるいは、話題となっている話し手の過去の行為を謝罪しているときに使用されていた。つまり、謝罪の内容が話し手と聞き手の間で明確である

という傾向が見られた。次の節では、「ごめんね」の使用場面のRの考察を行う。

5.3 「ごめんね」が使用されている場面とR要因の考察

「ごめんね」は、2つのシナリオの中で15回使用されていたが、そのうち10回はRが比較的小さい場面で使用されていた。さらに、その場面には2つの特徴が見られた。1つは、相手が怒っていないことや話し手の責任ではないことなど許される内容に対して謝罪しているという特徴が7例で見られた。もう1つは、突然謝罪をしているという特徴であり、1節で挙げた(1)、(3)を含め3例で見られた。なお、この3例は、相手が気にかけていないことを謝罪しているという点で1つ目の特徴も有している。

まず、1つ目の特徴として挙げた、許してもらえらる場面の例を見てみよう。次の(24)は杏子が勝手にシチューを作ったことを柊二に謝罪している場面である。

(24) [柊二の帰宅前に家に来ていた杏子がシチューを作ったことを謝罪する場面]

柊二：「あれ、いい匂い。なんか作った？」

杏子：「勝手にシチュー。ごめんね」

柊二：「ううん。食べる食べる」

(『Beautiful life』)

杏子が謝罪する前の柊二の「いい匂い」というセリフから、シチューを作ったことを柊二が不快に思っていないことは明らかであり、柊二のフェイスはほとんど侵害されていないことがわかる。そのため、この場面でのRはかなり小さいものであると考えられる。

次の(25)は、既に相手が許していることに対して謝罪を行っている場面である。

(25) [七瀬の代わりに喫茶店の仕事を手伝っていた間に手品ができるようになったと瑠璃が話している場面]

瑠璃：「七瀬たちがいない時にお店手伝ったでしょ？あの時店長に教えてもらったの」

七瀬：「ごめんね、ホントに」

瑠璃：「(呆れて) 七瀬、一生謝り続けるつもり？それより、恒介さんとはどうなってるの？」

(『七瀬ふたたび』)

(25)において瑠璃は、七瀬の代わりにお店を手伝ったことを責めているわけではない。さらに、謝罪の後に瑠璃が「一生謝り続けるつもり？」と言っていることから、七瀬はこれまでも謝罪をしており、瑠璃は既に許していると考えられる。そのため、この場面におけるRは小さいと考えられる。

一方、(26) はもう1つの特徴として挙げた、話し手が突然謝罪をしている例である。

(26) [柊二に買ってもらった靴を履いていないことを杏子が謝罪する場面]

杏子：「ごめんね……」

柊二：「何？」

杏子：「あの靴……」

柊二：「……？」

(『Beautiful life』)

(26) の場面で、杏子は突然「ごめんね」と謝罪し、柊二から買ってもらった靴を履いていないことを謝罪している。柊二は、「何？」と聞き返し、「あの靴……」という杏子のセリフの後何について謝罪をしているのかわかっていない。この場面で柊二が靴のことを気にしている様子はないことから、Rは小さいと見なすことができる。

この2つの特徴は、3節で述べたように謝罪に付加された「ね」が「謝罪の命題内容」と「話し手の態度」を顕在的にしようとする話し手の願望を伝達しているという機能に関わっていると考えられる。つまり、謝罪する内容が話し手と聞き手の間で既に明らかな場合である(24)や(25)は話し手の態度、例えば、「許しを求めている」や「申し訳なく思っている」という態度を顕在的にしていると捉えられる。一方、命題内容が明らかではない(26)の突然の謝罪では、「ね」の付加により、話し手と聞き手の間には顕在的にできる命題内容があることが伝達されていると考えられる。

以上のように、「ごめんね」の使用場面にはRが小さい場面が多く見られたが、15回のうちの5回については、Rが小さいとは判断できない場面であった。それは『Beautiful life』の中の2つの場面であり、どちらも杏子の行動が柊二に心配をかけてしまったことに対する謝罪である。その中の1つの場面が(27)である。

(27) [急にいなくなった杏子を、柊二が森の中で見つけた場面]

柊二：「バカヤロウ……」とまた力を入れる。杏子の生を確かめるように。

杏子：「ごめんね……」

抱きしめられたまま。

柊二：「ああ……」

(『Beautiful life』)

この場面では、杏子は柊二に、突然いなくなって心配をかけたことを謝罪している。柊二は杏子のことを非常に心配しており、この場面でのポジティブ・フェイスへの痛みであるRは大きいと考えられる。このような場面で「ごめんね」が使用されているのはなぜだろうか。

ここで考えられる1つの理由は、「ね」の付加により、命題内容に付随する

態度を顕在的にしたいという話し手の願望をより強く伝えているということである。つまり、「自分の行動を悔いている」という態度をより顕在的にしたいという杏子の願望が伝達されているのではないかと考えられる¹⁸。

5.4 まとめ

「ごめん」と「ごめんね」が使われていた場面の考察を行った結果、「ごめん」は謝罪する内容の負荷度であるRが大きい場面でも小さい場面でも使用されていたが、Rが小さいときでも謝罪の内容は話し手と聞き手の間で明らかである傾向が見られた。一方、今回対象とした「ごめんね」の多くはRが小さい場面で使用されていた。その使用場面は、許されるような場面や突然謝罪を始める場面であり、聞き手のフェイスに侵害を与えているかどうかさえ曖昧な場面であった。謝罪内容を比較すると、「ごめんね」は「ごめん」よりもRが小さいとき、すなわち、FTAがより小さいときに使用されていると判断できる。この結果は、4節で提案した仮説から得られる予測と一致し、「ごめんね」は「ごめん」よりもポジティブ・ポライトネスの度合いが高いという仮説を支持する結果となった。

- ▶18 その他の可能性として、D要因の他に「好きであること」や「心理的距離」が選択に影響を与えていることが考えられる。B&L (1987:16) も「好きであること」がポライトネス・ストラテジーの選択に影響を与える独立の変数である可能性を認めている。日本語の研究においても熊井 (2009) は「心理的距離」をストラテジー決定の要因として考慮に入れることを提案している。

6 結論

本稿は、Itani (1996) と井谷 (1998) に基づき、謝罪表現に付加する終助詞「ね」が謝罪の命題内容と話し手の態度を相互に顕在的にしたいという話し手の願望を伝達していることを示した。加えて、その機能から「ね」がポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであることを主張した。次に、「ポライトネスの累積」と名付けた、B&L (1987) が説明しているストラテジーを組み合わせることでポライトネスの度合いが大きくなるという現象が「ごめん」と「ごめんね」との関係に生じているという仮説を提案した。そして、データの検証は、仮説から得られる2つの表現の使い分けの予測を支持する結果となることを示した。

最後に、今後の課題は、他の謝罪表現に終助詞が付加した際もポライトネスの累積が生じるかどうかを明らかにすることである。

謝辞

本稿は、修士論文「日本語の謝罪表現『ごめんなさい』、『ごめん』、『ごめんね』の分析—ポライトネス理論からのアプローチ—」(2016、北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院)の一部を発展させたものです。本稿の執筆にあたり、ご指導いただいた上田雅信先生、貴重なコメントをくださった平田未季先生に感謝いたします。また、匿名の2名の査読者から詳細なコメントをいただきました。ここに記して感謝いたします。本稿における瑕疵は全て著者の責任です。

参考文献

- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. [田中典子 (監訳)・斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子 (訳). 2011. 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍的現象』東京：研究社]
- 陳常好. 1987. 「終助詞一話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞」『日本語学』10 (6), 93-109.
- 張群. 2007. 『詫び表現の中日対照研究—ポライトネスの観点から』麗澤大学修士学位論文.
- 日高慶美. 2017. 「日本語の謝罪表現『ごめんなさい』と『ごめん』について—ポライトネス理論からのアプローチ」, 『国際広報メディア・観光学ジャーナル』24, 39-55.
- Itani, Reiko. 1996. *Semantics and pragmatics of hedges in English and Japanese* 東京: ひつじ書房.
- 井谷玲子. 1998. 「日本語終助詞‘ネ’についての考察」, 『人文研究』133, 19-46.
- 熊谷智子. 2003. 「シナリオのある会話—ドラマの日本語の特徴—」, 『日本語学』22 (2), 6-14.
- 熊井浩子. 2009. 「日本語のPolitenessと対人行動に関する一考察」, 『静岡大学国際交流センター紀要』3, 1-26.
- Lee, Duck-Young. 2007. Involvement and the Japanese interactive particles ne and yo. *Journal of Pragmatics* 39, 363-388.
- 松村明. 2007. 『大辞林』第三版, 三省堂.
- 中田一志. 2009. 「発話行為論から見た終助詞ヨとネ」『日本語文法』9 (2), 19-35.
- 村田和代. 2002. 「日本語のポジティブ・ポライトネスをめぐって」『英語英文学論叢』21, 60-70.
- Ogiermann, Eva. 2009. *On Apologising in Negative and Positive Politeness Cultures*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Sandu, Roxana. 2011. *The Pragmatics of Japanese Apologies: On the (Non) Apologetic Functions of Gomen, Gomen Nasai, Sumimasen*. 博士学位論文. 東北大学大学院.
- Searle, John R. 1969. *Speech Acts: An Essay in Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber and Wilson. 1999. *Relevance: communication and cognition*: Harvard College. [内田聖二・中達俊明・宗南先・田中圭子 (訳) 『関連性理論—伝達と認知—』1999. 研究社]
- 滝浦真人. 2008. 『ポライトネス入門』東京：研究社.
- 宇佐美まゆみ. 1999. 「『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」現代日本語研究所 (編) 『女性のことば・職場編』241-268. 東京：ひつじ書房.
- Watts, Richard. 2003. *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yamazaki, Tomoko. 2000. “Politeness: How it is Realized in A Speech Act.” 『岩手大学教育学部研究年報』60 (2), 19-34.

用例出典

- 北川悦吏子. 2000. 『ビューティフルライフ シナリオ』東京：角川書店.
- 『Around40—注文の多いオンナたち—』(TBS, 2008)
- 『七瀬ふたたび』(NHK, 2008)

(平成30年10月29日受理、平成31年2月22日採択)

